2026年奨学生　　龍　秀美

＜総評＞

　口語詩句にはさまざまな詩形がありますが、私は基本的にはポエジーはひとつと思っています。口語詩句があたらしい詩形としてデビューするには、広く受け入れられる場としての魅力が必要でしょう。

　奨学生に選ばれた方々には折々に、初々しい「未知の広さ」が見受けられます。定型にこだわることなく新しい感性を受け入れやすいことが口語詩句のひとつの長所でもあるのでしょう。

　口語詩句にはアフォリズムという分野も含まれます。大谷翔平選手の名言「憧れてしまったら、越えられない」は、日本社会が持つ言葉への関心を表したトピックでした。文学として、社会批評として、何物にもさえぎられず表現できる場として、これからもさまざまな可能性が潜んでいると思われます。

　今年は応募作品が増えると共に新鮮な顔ぶれが多く見受けられました。中高生の方々にも広く期待します。以下、印象に残った作品を挙げてみます。

〇葉ざくら
ぜんぶここに容れて
　　ぜんぶが淑気になる

ロンドン橋落ちた落ちた落ちた
落ちたところに蘖ゆる
――言葉の選び方に特色がある作者。この感覚を伸ばしていくと将来が楽しみ。

〇川上　真央
クッキーの角までふくれ花明かり

黒鍵を押しこむような
はげしさを
灯し
あなたは無言を選ぶ

鼻濁音うすく伸びゆくような朝
たまごは水の声でやぶれる
――この人は、ふくらむ、押し込む、やぶれるというような現象を表す動詞に興味があるらしい。しかも、する側と、される側と両方に力が働いており、相互の関係がよく表れて

いる。

〇松下　誠一
見るからに心因性のカタツムリ

犯罪をしようとしたらこれだもん

薔薇の咲く体になったころですか
――対象と自分との距離の取り方が絶妙で、非常に楽しい。

〇ムクロジ
花陰にカレーは飯をまわりこむ

花冷の糸に重たいティーバッグ

ふの口でため息をつくとき時雨

亡き人の
LINE アカウントの残る
こーんこーんと叩く地球儀
――自然発生的な感情に動かされるとき、一方では身体は感情とは裏腹に無意識に動いている。矛盾した、または複合的な人間という存在。そのことに気付くとき、新しい発見もある。

〇互井宇宙論
木の瘤に木の呵責ある銀河系

どうやって伝記にならず
生き延びよう

雅歌だけで育つ鸚鵡に騙される

木耳を食べるフルート奏者たち
――ひとつひとつに、作者の深いところから出る物語がある。

〇金光　舞

ぺんぺん草と呼ぶモザイク
で手首の動脈を隠し
て
　い
る

母がいたらしい焼鳥刺してゆく

カクレクマノミが桜になってゆく

水馬の匂い捕らえる初老の父
――輪郭のくっきりとした、しかし優しい世界。

〇マズルカ
新しい神話が呪いとなるように
子育て雑誌のまぶしい聖句

泳がせた不倫が紅い鰭を持つ
ちにてんてんのいぢめのように

死ぬときは何時も一人だ
アンパンマン
だからごはんはふたりでたべる
――「子育て雑誌」「いぢめ」「アンパンマン」などのキーワードが、いつもと違う表情を見せてくれる。

〇さいう
いやほん
を
外せば耳朶は冷えていて
きおくの果てへ降る夕まぐれ

羽を挽ぐ
骨
のうごきを見つめれば
此世の森に揺れる野葡萄

ろっこつのかたち
に
鳥をまもるとき
けやきの喉はよくしなる　弓
――幾つもの印象的な言葉を連ねて、それをすべて活かす力は類を見ない。季語のダブりさえ口語詩句の特権のようだ。年々広がる作品世界が力強い。

〇彩燈　琴璃
かわせみが好きよ、
つるぎを胸に当て
鋭く水に刺す日があれば

真昼間に茹で大根が透けていく
また占いは少し当たって

ルノワールの描いた桃が、
少しだけ林檎みたいだ、
心臓を喰む
――期待と不安が交差する世界を描く。その狭間に生まれる謎が心地よい。

〇快名
絶滅がこの先ずっとあるだろう
それでも辞書に語彙、隣り合う

越境を終えた翼のようにして
青い器におくカトラリー

耳をすませてきこえるでしょう

さあ、風路　そこには、風路

きこえるでしょう
――自然の無機質な非情さと人間の精神の営みとの差異を描き出す。

〇大西　美優

かぶら汁ふむふむあれが倫理観

居待月
家具のなかでは椅子がすき

はつなつの性別欄に枠いくつ

木の芽どき
祖母のメイルのぎこちなく

――倫理観やジェンダーなど、時代によって変化する思想と取り合わせた、季語の新しい使い方が面白い。